

作場燒調查抄報

宮城篤正*

1. はじめに

沖縄の古窯研究は戦前、比嘉景常、鎌倉芳太郎、山里永吉氏等によって手がけられてきた。戦後は多和田真淳氏をはじめ、やちむん会などを中心に進められ、着々とその成果を上げつつある。(註1)

ところが現在、県下において考古学的に本格的な発掘調査が行なわれた古窯は1ヶ所もなく、基準となる年代や技法、窯の形式等いまだによくわかってない部分が多く、その面の研究が希薄である。今後、古窯の発掘調査が強く望まれている。

これから述べようとする大宜味村字謝名城の作場焼は長い間「幻の窯」とまでいわれてきた。ところが、一昨年から去年（1979）にかけて、その陶片等が多量に発見採集されたことによって、窯が存在していたことがほぼ間違いないことがわかつた。

筆者は去年（1979）12月18日に大宜味村教育委員会から窯跡確認調査の依頼を受けて現地に出向いた。調査にあたって陶片は採集出来たものの窯跡そのものを確認するまでには至らなかった。

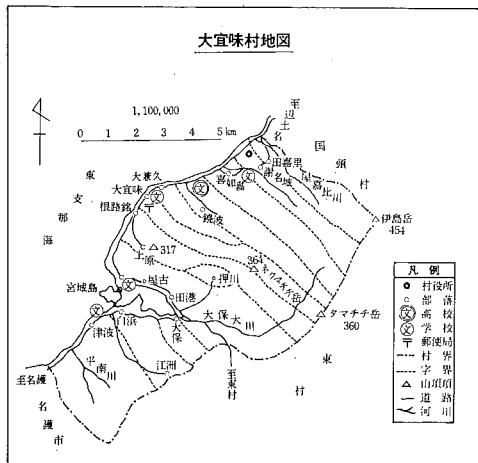
しかし、現地の状況や陶片などから判断すると、かつてその附近に窯があったことが推察された。

今後は記録保存のための発掘調査を行なうか、もしくは現状を破壊しない方向での保存方法を講ずる必要がある。しかし、いずれの場合でも、窯跡の位置とか範囲の確認がまず先決問題となる。

今回はさしあたって採集された陶片(註2)と現地調査にもとづき、作場焼についての中間報告という意味で、ごく簡単に述べてみたい。

2. 位置、地勢など

大宜味村の位置(註3)は沖縄本島北西、北緯 $26^{\circ}36'$ から $26^{\circ}43'$ の間、東經 $128^{\circ}5'$ から $128^{\circ}12'$ の



間に位置する。西は東支那海に面し、東を山岳地帯を境に東村に接し、北は田嘉里川をもって国頭村に接し、南は津波部落南方約2,500メートルの地点から瀬原崎に迫る山岳地帯の分水嶺をもって名護市と境を畳している。

また、地勢をみると、東西に8km、南北に14.4kmで、面積64.15平方kmである。しかし、中央にネクマチヂ岳(364m)がそびえ、全

(*みやぎとくまさ 県立博物館学芸員)

面積の約70%は山岳地帯で占めている。

河川は大小16あり、主なるものには大保川、平南川、大兼久川、饒波川、謝名城川、田嘉里川などがあり、いずれも東支那海に注いでいる。

全面積に対する耕地面積は畠が7%、水田がわずか2%にすぎない。村内には17か字あり、人口総数は昭和54年4月1日現在、3,635人(男1,701、女1,934)である。

一方、村内には田港御嶽の植物群落が国の天然記念物に指定(昭和47年5月15日)されている他、大宜味御嶽の植物群落と喜如嘉板干瀬が県の天然記念物指定(昭和49年3月18日)を受けている。

喜如嘉は戦前から芭蕉布の里として有名であり、広くその名が知られてきた。今日でも盛んに芭蕉布を織っており、県内は勿論、全国的にもその名が知られている。そして国指定重要無形文化財(工芸)として喜如嘉の芭蕉布保存会の芭蕉布(平良敏子氏他10名)が、昭和49年4月20日付で団体指定されたことは周知の通りである。

また、現在、喜如嘉で芭蕉布の技術継承とその発展のために中心になって尽力している平良敏子氏が県の無形文化財(工芸技術)として個人指定(昭和47年11月21日)を受けている。

3. 経過

作場焼が一般にその名前が知られるようになった経緯について少し述べてみよう。

1965年6月郷土史研究家の林清国氏は平良保男氏から依頼を受け、大宜味按司の墓の修理に立合い調査をした。そのとき、墓の中に見慣れない焼物があることに気づいて尋ねたところ、作場原で焼いた焼物であることがわかった。林氏はそのことを後日琉球政府文化財保護委員会へ報告、同年8月30日、当時文化財保護委員会主事多和田真淳氏他2人を伴ない再び実物と窯跡の調査を行なった。

そのときの調査のことが琉球新報(9月3日朝刊)に記事として扱かれたので、あれ以来作場焼なる名称が広く一般に知られるようになった。

その後、陶磁器研究者や、やちむん会による調査(1970年5月15日)等が行なわれた。しかし、一向に窯跡らしい場所や陶片を発見することができず、再び謎のベールに包まれた格好になった。あれから8年位の歳月が流れた1978年に、大宜味村当局では字喜如嘉に農村改善モデルセンターを建設すべくその準備を進めていた。ところが予定地内には喜如嘉貝塚(註4)があった。そこで一昨年(1978)6月1日より、同貝塚の範囲確認調査が開始された。その発掘作業には、県文化課の専門員の他に地元や那霸在住同村出身の方々も協力した。その発掘作業に参加協力者のひとりとして平良吉清氏(那霸在住)が加わっていた。

彼は発掘作業の合間をみて、かねてから聞いて知っていた作場焼の調査も並行して行なった。そのときに見つけた陶片を2回ばかり筆者のところへ持参したことがあった。はじめのうちはこれといった陶片もなかったが、ただ古我知焼とか喜名焼にどこか似通った陶片が多少混入していたことを覚えている。ところが、その後にやちむん会結成10周年記念「沖縄の古窯」展(註5)開催中に平良氏が多量の陶片を持ち込んできた。その資料をみて筆者はびっくりした。これまでより陶片の量が多くなったことにもよるが、その中には湯呑と窯壁片の附着したもの、窯クソ、窯道具など窯の存在を裏付ける有力な資料があったからである。

おまけに喜如嘉の旧家に作場焼らしい対瓶があることも知らせて来た。そこで筆者はそのうちの

1個でも是非借用して来て欲しいと頼んでおいたら、幸いにも古窯展開催中に平良氏の努力で1個を借り受けて来てくれた。早速、陶片資料などと比較してみたらほぼ作場焼に間違いないと思われた。

そこで会期の途中からではあったが、新発見の作場焼対瓶と多量の陶片を展示することが出来た。(写真11参照)それ等の資料から考えてもはや作場窯の存在は動かしがたいものとなり、一氣にもやもやとした霧が晴れて明るい太陽のもとにさらされるかたちになった。

そして前述した如く、去年(1979)12月18日、大宜味村教育委員会から依頼を受けて窓跡の確認調査を行なって現在に至っている。

4. 考 察

調査地はやはり筆者等が今から10年前に行なった同じ場所であった。具体的には字謝名城作場原の畠744、原745、746、747の地域とその周辺であるが、今回の調査は上記の地番（図面に斜線で示した。）に限った。

現地には根路銘小之墓(写真1参照)があり、その上方の畠、原一帯を調査した。

そこは戦後、やまいもなど植えた畑であったが、地味がよくやまいも栽培に適していたといわれる。その附近の数か所を試掘してみたが、結論を先きにいうと実際に窯跡そのものは確認出来なかった。しかし、周囲の段畑から出た小石類を1か所に集めた場所（写真2参照、そこをイシシッティジョーマという）があり、その小石の中に陶片、窯クソなどが数多く混入していた。その状況から判断すると近くに確かに窯があったものと推察される。

ということで、一定地域にしほつたが、窯跡そのものはまだ未確認というところである。

次ぎにこれまで採集された陶片資料と現地の状況から考察をしてみたい。



作場焼に関する文献資料は皆無に等しい。そして今日では、もはや聞き取り調査も困難な状態である。しかし、今から10年ほど前に聞き取り調査をした際、あの当時80歳以上の老人が「さばやき」の名称を覚えていたことから考えると、確かににかがあったことは想像された。

更に平良家（屋号ウィーナー）が管理する「村墓」には作場焼といわれる厨子壺があるといわれるが、筆者はいまだ実見するチャンスに恵まれない。一方、野里家（屋号根謝銘のタキミー）にあった壺（耳なし）は、林清国氏がゆずり受けて持ち帰ったとのことであった。その壺も作場焼といわれるもので話によると、口が小さく、壺の表面には気泡が多く、あばた状のものであったという。ここで少し付け加えておかなければならぬことは、これまでいわれてきたいいくつかの作場焼の製品と採集された陶片を比較してみるとかなり相違している。これまでいわれてきた作場焼はどちらかといえば、焼きが強過ぎてあばた状になった壺屋焼の製品である場合が殆んどであった。ついでにあと一言付け加えておきたいことは、作場焼なる名称そのものは、やはり地名（原名）にちなんでつけられたものである。

以上、述べた他にはこれといった聞き取り調査も進まず、大半は霧の彼方にかすんでしまっていたという印象があの当時から強かった。

作場窯があったと考えられる場所一帯を地元では崎山クブと称している。この崎山クブには今から70～80年前、首里からきた崎山という人が住んでいたといわれ、近くにその屋敷跡があって、まだその面影をとどめている。そして屋敷あとからは壺屋焼の荒焼壺や徳利、上焼の皿、碗、面取湯呑、からからなどの陶片が散見される。しかし、前述の作場焼の陶片とは明らかに異なるものであることは言を俟たない。

また、崎山クブを別名チブヤウイーともいう。この呼称はかなりの年輩者でないとわからないと、当時、私たちを案内してくださった大城真秀氏（故人、当時大宜味村議会議長）は話しておられた。昔はこの崎山クブ近くに染料用の藍壺がいくつか置かれていたといわれる。そこで壺の上という意味でチブヤウイと呼んだのかどうかという素朴な疑問も抱くことが出来るが、近くに確かに窯があったと見られる今日、やはりチブヤは壺屋と解釈すべきだと思っている。

琉球王府では、1609年薩摩の侵入後は国内において、工芸産業振興政策に力を入れるようになる。たとえば、薩摩から一六、一官、三官の三人の朝鮮陶工を招聘（1617年）したり、平田典通（1641～1722）を中国へ派遣（1670）して進んだ中国の陶技を研修させたのもそのあらわれとみられる。

更に、王府は離島の八重山にも陶法を伝えるべく、仲村渠致元（1692～1754）を彼地に派遣（1724）するなど積極的な政策を打ち出したことは周知の通りである。

そこでまず考えられることは、作場焼もその一連の政策としておし進められたのではなかったか、ということである。作場焼だけではなく、古我知焼のはじまりもおそらく同様に考えることが出来るのではなかろうか。

というのは、古我知焼、作場焼を比較して、ある程度差異はあるものの、いくつかの共通点を陶片資料から見出し得るのである。勿論、古我知焼の場合、地の利がよかつたので作場焼とは比較にならないほど多くの製品を作り、釉薬もより上質の黒釉、飴釉を使用している。その点では確かに

大きな差異を生じているが、しかし、擂鉢の形式といい、フイガキー(碗などの例)の技法、焼成方法(環元焰焼成)などはよく類似した点である。

ただ、作場焼の場合、陶片を分類してみると製品の種類も少なく、作られた製品もそんなに多くはなかったように思われる。とすると、窯の規模も小さく、ごく短期間だけ焼かれたものと考えられる。

なお、林清国氏の調査にも「城村の前田さん(78歳)の話では、昔公儀(首里王府)から陶工が派遣されサバ原で焼いたが、此の陶工はサバで死亡して窯場の麓の墓に葬ったとの伝えが有ると語っている。」『根謝銘文化略史』〔(北部観光編)1967年。〕となっている。このことも前述した陶業振興政策と結びつくものであるが、それにしても文献記録にないのは多少ひっかかる。とはいって、古我知焼、喜名焼の如き窯でも記録にない例もあるので、そんなに問題にする必要はないのかも知れない。

次にもうひとつの見方も出来る。すなわち、小さな窯でごく短期間だけ焼いたのなら、あるいは誰かの試験窯ではなかったか、という見方である。この観点に立つと、これまで抱いて来たいいくつかの疑問点が氷解する。

試験窯だとすると、一体誰によって築かれたかということがまず興味ある問題であろう。

しかしこのことはなかなかむつかしく、安易に陶工名をあげることは出来ない。こういうことは、 性急に決めてもあとに問題を残すので慎重を期す必要があることは勿論である。

文献にみる陶歴などから推察すると、平田典通が20代の頃に諸間切を廻って焼き物、並びに白土などを取り調べている。その頃の調査というのは、おそらく現地である期間滞在して試みに焼いてみて結果を判断したことも考えられる。彼は努力家で人一倍熱心であったので、二年後には王府の陶工として採用され、のち中国へも派遣された名陶工であった。

ここで再度断っておきたいことは、平田典通の名前をあげたが、なにも平田に固執するつもりは毛頭ない。平田ほどの名陶工が作場原で焼き物をはじめたというより、むしろ、当時無名の陶工たちもたくさんいたことだし、彼等のうちの一人が作場焼をはじめたという見方が正しいかも知れない。ここではむしろ、文献に現われない陶工のうちの誰かといいたいのであるが、具体的な名前がわからないので、たまたま平田典通の名前をあげたに過ぎない。

作場原の窪地は今日とは違っておそらく昔は、小船が接岸出来たであろうと想像される。つまり、これまでいわれている屋嘉比港に隣接する格好になる。そうだとすると、窯のあった場所は船着き場のすぐ近くにあったわけである。

陶片から分類すると、甕、壺、鉢、火取、対瓶、擂鉢、徳利、土瓶、湯呑、碗、さかずき、アンダカーミ(?)などが作られている。しかし、なかでもフイガキーの技法による碗が多く作られていたように思料される。

擂鉢の形態に二種類あり、古我知焼の製品とも技法上の共通点がみられる。このことはほぼ時代的にも接近していることを伺がわせるものであろう。

次に釉薬であるが、黒釉系が使用されている。焼成は環元焰焼成であり、陶片の断面をみると内側は赤味がかったり、外側は灰色状を呈している。また、酸化焰焼成のような状態になって赤っぽい陶片もなかには含まれている。更に壺の口縁部に珊瑚石灰石をおいて重ね焼きをした跡がみられる。この点は喜名、知花焼にもみられるものである。また、壺の底部に同じく珊瑚石灰石をクサ

ビ状にはさんだようで、底部にその形跡がみられる。

成型にはロクロを使用し、ロクロ技術もなかなかの上手さを伺わせる陶片も含まれている。

施釉には前述したごとく、フイガキーの技法がみられる。壺類は平底(板おこし)で、碗の場合は、輪高台(または普通高台)の他に少しかわった高台削りがみられる。

陶土はその附近で採れるものを使用したとみて、壺などの胎土に石英粒がはまり込んでいる。

窯道具はあまりみかけないが、三角形のクサビ状の窯道具がみつかっている。窯クソや窯壁片なども陶片と一緒に採集されている。かわったものでは瓶子のものと思われる陶片に蓮弁陰刻文がみられるが、喜名焼あたりの影響ではなかろうか。

壺の肩あたりの陶片と思われるものにメ状の線彫りがあるが、それはなにかの目印かも知れない。壺屋でいう判に相当するものと思われるが、いまのところよくわからない。

平良家に伝世する対瓶の底部にもやはり線彫りの印がある。底部に判を入れる例は八重山焼に多くみかけるが、胎土といい、釉薬といい、雰囲気が非常によく似ているのはなにかしら興味を抱かせる。双方の製品ともかなり重い。時代がもし同じ頃だとすると仲村渠致元とか、仲宗根喜元(1670~1764)などの陶工がおり、また同時代の無名の陶工たちの可能性が高くなってくるがなんともいえない。

作場焼は陶器産業振興政策の一環として王府から派遣された陶工によって築かれた窯であったのか。そして、思い半ばにして陶工の死によって窯が絶えたのか、あるいはまた、海上輸送機関の発達によって壺屋の製品等が運ばれてくると作場焼の販路が失なわれてやむなく廃窯に追い込まれたのか、いろいろ想像をたくましくすることが出来る。

また、試験窯的にある一時期陶器を焼いたのであったのかはよくわからないが、いずれにせよ作場焼の窯は小規模で、その上窯が煙を吐いた時期もそう長い期間ではなかったと思われる。陶片資料から判断するとそんなに大きな製品ではなく、また量もいわれているほど多くはなかったのではなかろうか。とすると、今日に伝わる製品も少なく、また地元でもあまり知られることなく、ひっそりと歴史の霧の彼方にかすんでしまっていたことも頗ずけるような気がする。ところが、逆に古我知焼を例にだとすると、今日にその製品は実に多く伝世しているにもかかわらず、窯に関して殆んど聞き取り調査をすることが出来るのは一体どう解釈したらよいだろうか。おそらく昔は陶業も農業も人々にとってはなんらかわることなく、今日の異常ともいえるほど陶器に興味関心を抱くこともなかったのかも知れない。あの当時の陶器は、日用雑器であって芸術品ではなかったことにも起因するのであろうか。

5. おわりに

あれこれ推察することは楽しいが、果して真実はどうであったかはよくわからない。またじっくり検証する時間的余裕も今はない。

しかし、いずれにせよ、技法や製品などからみて、作場窯が築かれた年代はそんなに古くはないと思われる。今はざっと17~18世紀頃と考えている。この窯は沖縄本島におけるもっとも北に位置する古窯であり、また多くの陶片が発見されて話題を巻き起して注目されたのは去年のことであった。

今後、本格的な調査が行なわれ、その全容が明らかにされる日もそう遠くはないものと思われる。これまで述べてきたことも、それまでのつなぎとしての中間報告と考えている。

〔追記〕 参考資料として沖縄古窯跡(瓦窯を含む)分布図を掲載しておいた。

註1 多和田真淳氏の「琉球陶器の分類学的考察」(『月刊考古学ジャーナル』4.1972)、『やちむん』特別号『図録沖縄の古窯』(1979年)

註2 平良吉清氏採集の陶片

註3 大宜味村勢要覧(昭和54年度版)を参照した。

註4 1960年、高宮広衛氏によって発見された貝塚である。

註5 「沖縄の古窯」展、主催 やちむん会、後援 沖縄県立博物館、沖縄タイムス社、琉球新報社
会期 昭和54年10月2日～10月14日 会場 沖縄県立博物館特別展示室

図版 1



写真 1 墓の後方の林の中から多量の陶片が出土した。



写真 2 この場所から陶片が出土する



写真 3 対瓶(向って右) 高さ19.1cm
平良真次氏所有



写真 4 対瓶の底部

図 版 2



写真5 碗の陶片

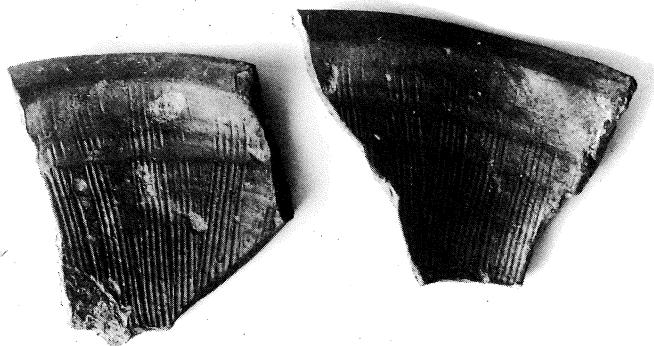


写真6 捶鉢の陶片



写真7 湯呑(窯壁片と接着している)



写真8 向って左、窯道具、右は窯壁片

図版 3

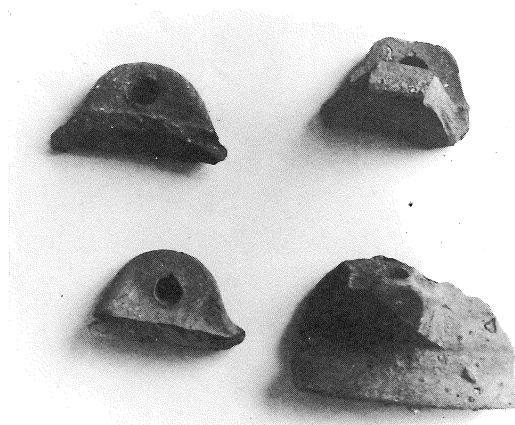


写真9 耳 右の2片は火取の耳



写真10 黒釉香炉(喜名焼と思われる)
高さ9.9cm 平良真次氏所有



写真11 陶片のいろいろ、中央は対瓶
「沖縄の古窯」展の展示より

沖縄古窯跡分布図

—瓦窯を含む—

